



Rhapsody 邦子 狂詩曲

Report

01

稽古場レポート、はじめます。

稽古場レポート、はじめます。

中村蓉が研鑽を重ねてきた向田邦子原作ダンス作品のリクリエーション&新作のダブルビルとなる、芸劇dance『邦子狂詩曲(ラプソディー)』。

2024年8月9日(金)～12日(月・休)の公演に向けて、島地保武と西山友貴が出演する新作『禍福はあざなえる縄のごとし』から稽古が始まりました。

「禍福は糾える縄のごとし」とは

《「史記」南越伝から》幸福と不幸は、より合わせた縄のように交互にやってくるということ。吉凶は糾える縄の如し。(出典:デジタル大辞泉)

向田邦子さんと深く親交のあった黒柳徹子さん。様々な書籍や対談で、向田さんへの想いを語っています。この言葉は、向田邦子さん脚本のラジオ番組に出演していた、黒柳徹子さんが演じる役の台詞の中にありました。楽天的な黒柳さんは当時、「幸福の縄ばかりで、燃ってあるってことはないの？」と本来の意味に対してあまり腑に落ちていないようでしたが、向田さんは「ないの」と断言。黒柳さんはそれからの親交の中で、向田さんとの思い出や向田さん自身がこの言葉と結びつくのだと実感することになります。

黒柳さんと出会った当時、恋人を亡くしていたこと。直木賞受賞パーティーの朗らかな挨拶。その日から1年も経たないうちに飛行機事故でお亡くなりになったこと。事故の年は『窓ぎわのトットちゃん』が刊行され、幸せな出来事があった年でもあること。

黒柳さん自身、向田さんが亡くなった1981年は、いつになく「禍福はあざなえる縄のごとし」であると実感したそうです。

中村蓉曰く、『花の名前』は物語自体を表現していくような創り方に対して、『禍福はあざなえる縄のごとし』では向田邦子という作者自身、向田邦子作品全体から読み取れる考え方や人生を表現したいと語っています。黒柳さんと向田さんの印象深いエピソードが新作の思惑にも重なることから、タイトルとして決定したそうです。

『禍福はあざなえる縄のごとし』稽古レポートでは、創作の柱となっているいくつかのエッセイをフックに、向田邦子の思考、中村蓉の思考、どのように縄をより合わせるのか... 身体で、話し合いで、試行錯誤しながら進められている稽古の様子をお届けします。

もちろん『花の名前』稽古レポートや、「関連企画 中村蓉と向田邦子作品を踊ってみよう」の他、通し稽古や劇場入りの様子へとレポートは続きます。

観劇に向けて創作過程から共に楽しんでいただいてもよし。

「あれはこの想いが反映されていたのか」「このエピソードがああ身体と結び付くのか」等、観劇後より深く楽しむために取っておいてもよし。

創作過程にしか存在しない寄り道やふくらましの数々。

全てをご紹介しますが、公演以外のことにも触れていただける機会になれば幸いです。

参考

『トットのマイ・フレンズ』向田邦子さん／黒柳徹子／新潮文庫／1990年

Voce / 【黒柳徹子】最愛のお友達、作家・脚本家の向田邦子さん (<https://i-voce.jp/feed/3078712/>)